

雑報

雑誌名	龍南會雑誌
巻	1 0 2
ページ	5 8 - 1 1 1
発行年	1903-11-25
その他の言語のタイトル	雑報
URL	http://hdl.handle.net/2298/5638

雜報

○祝天長節

金風白露、秋正に關にして馴馬高天に嘶く時、微臣等、茲に我が 今上天皇陛下第五十二回の誕辰を祝すべき、天長の佳節に遭ふ。

恭しく惟みるに、陛下聖明の德を以て、日東の寶祚を踐み給ひてより、夙夜萬機を親裁し給ひ、文武の盛華鬱然として誠に一代の偉觀を呈し、殊に皇化穆々、遐裔に覃び、稜威天日と共に六合に治く、四民額手して明治の治平を謳ひ、聖天子の萬々歳を祝せざるなし。時や恰も稀有の豊稔を呈し、美穀穰々として倉廩に滿ち、擊壤鼓腹の歡至る所に湧く、嗚呼亦盛なる哉。微臣等何等の多幸ぞ、此の聖世に生れ安じて研致の樂を享くること。世を蓋ふ皇天の恩澤誠に云ふ所を知らざるなり。

今日此の佳辰に際し、微臣等誠心誠意、謹んで聖壽の無彊を祝し奉る。

○第十三回開校紀念會

秋氣漸く熟す十月十日、本校創立第十三回の紀念式を舉行せらる。天高く晴れて曦影鮮かに阿蘇の山縁を彩れば、曉風一過四圍の松濤を躍らして、音は校裡七百の歡聲と相和す。

龍山の麓、素川の畔、巍々たる赤煉瓦の校舍は舊態昔にかはらねど、百般の設備は年と共に整ひ、卒業生を出すこと既に一千二百の多きに達して、其形實兩面の發展駸々として今や眞個西海學術の中心となり、而も前途の發展また測るべからざるものあり。吾人此の佳辰に際し歡呼して母校の光榮ある過去と、進歩せる現在と、及び多幸なる未來とを祝福するの情に堪へず。仰げば紅白の旒旌翩々として清き朝風に翻き舞ふ午前九時、來賓、職員諸氏及び生徒一同雨天体操場に來集す。

正面には三間の筵額に適勁の筆を揮つて紀念の二大字を書したるを掲げ、壇の左右には甲冑と

書籍とを飾りて文質と武魂とを隱章す、講場には幾百の彩旗を縦横に張り飾りて景趣一段の盛華を呈せり。校長先づ起ちて、勅語を捧讀し次で祝詞を朗讀せらる、次に職員總代として遠山教授、生徒總代として池田秀雄氏共に祝詞を朗讀せらる、終りて本校卒業生諸氏の祝電朗讀、生徒の祝詩歌朗吟あり、最後に生徒一同『阿蘇の峯より』を合唱して式を終る。

直ちに擊劍試合あり、憂々の響場を動かして、龍腕虎奔の風姿颯として人の肉を動かすものありき。終りて來賓一同機械諸教室の來觀に赴く。午後陸上運動を開始す。小春日和の日の光暖かに運動場を照せる處、健兒勇を鼓して一去一來輸贏を爭ふ意氣の軒ること秋昊よりも高し、委員の手廻しよかりし爲め運動は次へ次へと頗る敏速に行はれ、はや其の半に達せし頃習學寮のあたり俄かに人聲騒がし、只見れば「十九人十九色」の旗押し立てゝ進み來る假裝の一隊、黒

革威の武士を初めとして取つて嚙まんブイカメの鬼、夜叉面のハイカラ紳士、南寮のお百姓さん、首筋逞ましきお多福嬢、飯簍蓋の虛無僧、仁木彈正、ドンネル、高妙翁など何れも奇妙奇手列、之に續いて三部三年の奇兵隊あり、和洋折衷の軍裝足並揃へて練り歩く、運動場は時ならぬ哄笑の聲に浮き立ちぬ。

斯くて幾多の競技は無事に勇ましく終りを告ぐるや、櫻井會長は場の中央高臺の上に立ちて我が龍南會の萬歳を三稱せらるれば、之に和する歡呼のどよみは高くく。目出度くこれにて今日の會を終りぬ。

左に本日の勝利者を記さん、

第一回 旗拾

1 石河 2 松村 3 惠利

第二回 全上

1 高田 2 田中進 3 園

第三回 戴囊

I 沖 2 小田 3 佐伯 4 松永 5 高田

第四回 全上

I 村川 2 西田 3 4 黒田

第五回 全上

I 上田 2 長谷川 3 余田 4 島田 5 徳永

第六回 二百二十碼

I 田島 2 大野 3 飯田

第七回 全上

I 曾根 2 鹿兒島 3 中島

第八回 提灯

I 村井 2 川口 3 鈴木 4 下津 5 桑名

第九回 全上

I 島田 2 高瀬 3 古賀 4 水上 5 平井

第十回 全上

I 中島 2 武尾 3 石原 4 富田

第十一回 全上

I 望月 2 松村 3 加藤 4 藤田

第十二回 全上

I 田中誠 2 石川 3 田代 4 沼川

第十三回 全上

六十

I 稲田 2 坂本 3 園

第十四回 全上

I 林 2 平井 3 武尾

第十五回 二人三脚

I 加藤、元松 2 永松、波多 3 西村、南條

第十六回 全上

I 米澤、大村 2 上野、佐藤 3 西村、森山

第十七回 障害物

I 石河 2 小池 3 永松

第十八回 全上

I 永松 2 山崎 3 沖

第十九回 全上

I 佐藤 2 三戸 3 田中

第二十回 母衣曳

I 石原 2 神保 3 飯島

第二十一回 自轉車

I 北川 2 溝部

第二十二回 全上

I 清水 2 金森

第二十三回 全上

I 竹内 2 荒木

第二十四回 四百四十碼

I 高田 2 西村 3 加藤

第二十五回 全上

I 大野 2 田中 3 鹿兒島

第二十六回 小學校

I 平井 2 山室 3 永瀬 4 三好 5 泉

第二十七回 全上

I 永村 2 松本 3 島田 4 福田 5 伊藤

第二十八回 全上

I 水田 2 江上 3 早瀬 4 鬼塚

第二十九回 檐架

I 村山、藤岡 2 田口、本田

第三十回 サツクレース

I 永松 2 品川

第三十一回 全上

I 森山 2 三戸

第三十二回 旗送

紅軍勝

第三十三回 戴囊

I 田口 2 徳永

第三十四回 中師農工商學校

I 熊中、池邊 2 師範、箕田 3 熊中、福田 4 濟々、齊藤
5 熊中、松尾

第三十五回 職員

I 野口 2 吉田 3 山田 4 早崎 5 中島

第三十六回 來賓

I 林 2 まろちん 3 飯星 4 細

第三十七回 炊夫小使

I 宮村 2 緒方 3 田中 4 須田

第三十八回 委員

I 藤野 2 森 3 大野 4 恵利

第三十九回 八百八十碼

I 岩松 2 加藤 3 後藤 4 神保 5 元松

第四十回 各組撰手(八百八十碼)

チャンピオン 高田 景(二部三年甲)

○龍南會演說例會

撃析三回、雜報子筆を載せて疾く場に至り、例によりてその梗概を記す事左の如し。時間の確守を勵行せんとて聴者甚だ多からざるをも意とせず、午後六時半より開會す。

精神的自由

吉永友太君

自由の重大なるは喋々を要せず。革命廓清や、社會の一大變動は之を得んがための團體の行動なり。個人の煩悶努力も亦個人が之に達せむが爲めの行動なり。然るに自由や精神的と肉体的との別あり。富貴威武も之を淫する能はず、之を屈する能はざるが如きは前者に達せむとして造詣の漸く深きものにあらすや。然るに之を得んことは必ずしも後者と伴はず。幾多の事例は、轉た吾人をして酸鼻に堪へざらしむるあり。而るに社會の現狀は果して如何、肉体を犠牲に供する迄に精神的自由に憧憬するものありや。英雄人を欺くの語が歡迎せらるゝ社會は偽善に満てる社會なり。罪惡に充てる社會なり。精神の自由靜止安慰、果して彼等にありや。由來我立國の根底は武士道にあり、武士道的神髓は精神の自由にあり。即ち知る、精神の自由は我國是の定まる所なるを。

六十二

軀軀倭小案を拍つて慨する所、人を壓するものなきにあらざるも、引証陳套にして拙劣なりしを惜む。

社會主義と吾人が平等觀 森揆一君

社會主義は現今の一大思潮なり。その起因は要するに貧富の懸隔にあり。一派の社會主義者は論じて曰はく、肉弱強食は不平等なり、強を割きて弱に奉じ、塗炭の細民をして資本家たると同時に勞働者たらしめ、以て社會の圓滿をなすべしと。彼等は差別を排し、平等を得んとして絶叫す、これ全然不自然たるを免れず。先づ彼の平等と差別とに就きて云はむか、宇宙は體と相とより成ると觀るを得べし。哲學的宗教的見地よりすれば、宇宙は平等の一體なり。差別より觀すれば、萬物皆差別相の支配を脱する能はず。彼の論者の言ふ所は全然差別相を忘却せるなり。彼等は之を無視して、直に絶體の本體に歸せしめむとす。これ不自然にあらずして何ぞや。吾人

が平等觀はこれと異なりて、決して差別相を無視するの妄をなさず。

説き來り、説き去る音吐明瞭ならざるにあらずるも、由來君が威容に拘泥せざるはいたく聴者の感興を殺ぐの惧なきか。其のぶらさげられたる腰邊の大手拭。其の開かれたる胸間、而も下着の釦を有せざる、無頓着も度を過ぐれば愛嬌にあらずして、嫌厭の情を發せしむるものあり。

現時の學校教育に就きて 小中恒行君

宇宙の本體は向上しつゝあり、宇宙の現相たる森羅萬象も亦向上にあり、而して人は万物中尤も卓越せるものにしてこの向上の急先鋒者なり。これ一派の哲學者が論ずる所なり、この見地よりする時は、人の子を教ふべき學校教育は宇宙の向上に資するものならざるべからず、これ考へ得べき教育の一意義なり。然らば現時の學校教育はかゝる瞭解を有せるものと満足を得つゝ

ありや。吾人は疑なき能はざるなり、試に此見地より現下の教育を一瞥せむか。予は先づ現今の教育が畸形を作りつゝあるにあらざるやを疑はむとす。歴史は或意味に於て時代教育の反影と認むべきものなり、而るに現今の教育は如何に反影しつゝありや。見よ knowing を主とするは、これ人の子を畸ならしむるものにはあらざるか。而も「知る」は單に空文によりてするのみ、實際に至りては全く風馬牛なり、知るが爲めに知る、これ教育者の實相なり要は爲さむが爲めに知るにはあらずや。かくて to know を等閑視する結果は直に to know の力を失ひ、従つて生ずる惡結果は常識の缺損、休軀の虛弱、品性の卑劣等、吾人が痛恨の例頻々として至るにあらずや。と實際を捕捉し來りて教育の缺陷を衝く、隱微の辨よく人をして首肯せしむるものあり。されど蛇尾に終りし嫌あるは大に惜むべし。且つ前半三十錢哲學にかぶれたりと見ゆるは如何に。

半島の日本

江崎 規矩君

我國民は膨張的國民なり。是れ實に我國が帝國主義を採るに際して必須なる根本的要素なり。而して年々増殖しつつある同胞をして、何れの方面に移殖せしむべきか、政治的に地理的に歴史的に觀察して、鶏林は實にこれが好箇の地點なり。思ふに鶏林の地は日本海のシ、リーなり。先づ之を得るものはローマたるべし、失ふものはカルセーアとならざるべからず。およそ帝國主義に三あり。曰はく精神的、曰はく軍事的、曰はく經濟的帝國主義是なり、而もこの三者は相俟つて一の完全なる帝國主義を實現するを得べし。然るに我が朝鮮に於ける前二者の勢力は如何、暫らく之を措いて論ぜざるべし、今第三者に就きて述べむか。

第一經濟事情 韓國貿易を盛ならむるに三箇の要素あり。一金融機關、二交通機關、三税關、以下順次之を詳説すべし。(一)吾人は金融機關

として第一銀行支店を有す、蓋し朝鮮經濟界の霸たり、租税以外凡ての金融の集中離散一にその掌中にあり。(二)交通機關、朝鮮の如く交通の不便なるはなかるべし、然るに海路に至りては我二商船會社の定期航海あり、到る處の港灣、日章旗を見ざるなきは喜ぶべきなり。是れ日本が朝鮮に於ける勢力の消長に大干係を有するものなり。而して翻つて陸路を見むか、京釜鐵道の現狀は如何、予は殆んどこれを公言するを憚る、されど事實をして事實を語らしめよ。吾人は彼の露國が朔風凜烈の北地を横貫する一大鐵道を完成するに至りし大規模を察し、瑣々たる本鐵道が未だ開通二十哩餘なるを願て、その微々たるに驚かざるを得ず。然るに新紙の傳ふるところによれば京義鐵道の敷設權を我に占得せりと、吾人は是れ等の鐵道が一日も早く完成せられむを冀望す、是れ我朝鮮に於ける勢力を大ならしむる所以なればなり。郵便電信の如きも

亦機關の一として欠るべきならむも略すべし。

(三)税監に對する我が措置は全然失敗たるを免れざるべし。清國貿易に最利害の干係の大なるは英國なり。故に清國の總稅務司は英人なり、韓國貿易に最も利害干係の著しきは日本なり。

而も稅務官には日本人その椅子を占めず。是れ根本に於て朝鮮經營を誤れるものにはあらざるか。然るに以上三者中不完全ながらも二者は殆んど我が獨占の狀なり。加ふるに十万の同胞數百の憲兵、一大隊の兵士のあるあり。然らば我彼地にありて我は優に朝鮮を左右し得るか。否然らず。決して然らず。資本薄き我國人は朝鮮に於て成功せざる所以なりと稱するものあれども、是れ殆んど皮想の見なり。蓋し事業の根本は不撓不屈の精神なり。資本の如きは寧ろ末のみ。見よ、朝鮮は最早や一攫千金の地にあらず。最早やかゝる亂調子の時代は經過せり。然るに便船毎に入り來る幾多の邦人は殆んど投機的の

射利を願ふもののみなり。故に着實ならず、熱誠ならず。直ちに歸國するにあらざれば、内地に入りて無賴の徒となるに過ぎず。是に於て乎、吾人は深刻なる國民的觀念を有し、健實なる地歩を彼地に作らんとするものゝ入韓を願ふや切なり。

第二朝鮮の外交管見 朝鮮には大臣なく、人民なく、皇帝一人なり。皇帝一人の國家なり。故に外交は必ず宮中雲深き所に決せらる。彼の大臣は多く皇帝に代りて各國の鞭撻を受くるものなり。故に彼のソンタク嬢を擁して、寵に媚ぶるに巧なる國の外交が多く成功する所以にあらざるか。且つ云ふ迄もなく韓國に於ける主なる二勢力者は日露なり。外交上、經濟上、その他の點に於て我が國が好箇利便の地位にあるに拘らず、常に露に一籌を輸するやの觀あるが如くなるは、是れ何ぞや。彼が外交の常に人爲的なるに反して、我外交の放任的なるにはあらざる

か。放任的外交の成功し難きは此際明らかに認め得べき實例なきにあらず。

予をして繰り返さしめよ。半島は我が國民の膨張發展上必須のものなり。故にこゝにその勢力を扶殖するも否とは實に、國家百年の運命に關す。或は曰はく半島は銚を吾に向けて横たへられたる劍の如しと先づ他に占得せらるゝことあらば、危害は直ちに我に墜下し下らむ。嗚呼今や實に國民が覺醒奮起の時なり。

その語氣は如何。その態度は如何。これ演題の如何なる種類たるを問はず、その成效の要素として各人の認むる所なり。従つてその音聲は、てふ問題も輕視すべきにあらず。その風姿舉措も亦河漢に附すべきにあらず。然らば吾江崎君に至りては如何。丈高からずと雖も邦人としては低しと云はせ。その濃き眉、隆き鼻、而も近時に至りて漸く萌芽し來れる鼻下の髯の藁然たる、青みを帯びたる面容、宛として、鬱憂病者のそ

れの如し。而も語る時は、即ち先づ世界の大勢を論じて、我國家を憂ひ、當路の政策を憂ひ、滿韓問題を憂ひ、國民の將來を憂慮しその負荷の輕からざるを憂苦す。今日の説く所も亦「憂」字の外に脱せず。もし夫れ君が姓名に憂の一字を含まば、名詮自稱とは蓋し君を以て好適例となすならむ。然るに語るに際してその語氣の熱誠なる亦一段なり。蓋し虹となりて天を貫かむと欲すとは君が語氣の事なり。今夕半島の日本を論せむとするや開口叫んで曰はく「予は彼の社會主義者の傾聽するを願はず。四民平等の出世間を説くものに對して語るを欲せず。要は膨張的國民の有爲なる青年に訴ふる所ありて以て其決心を促さむとするなりと。

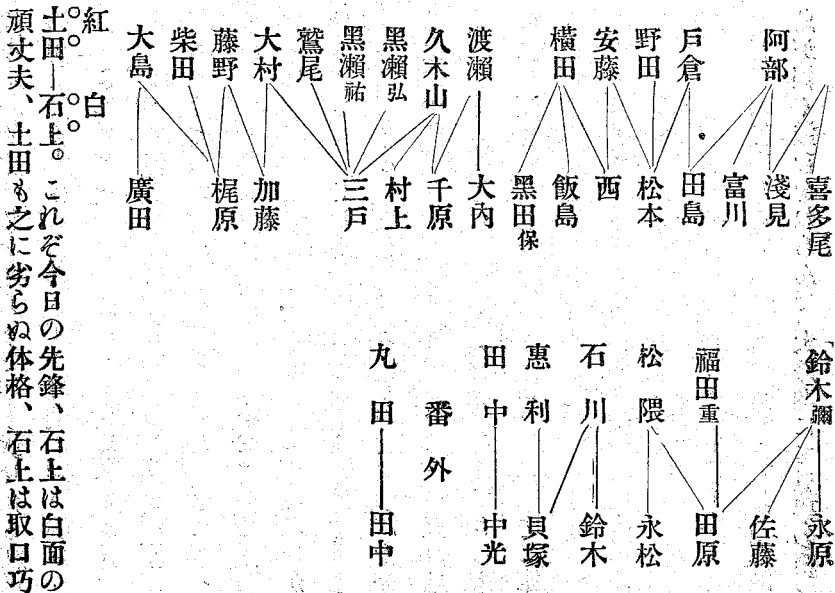
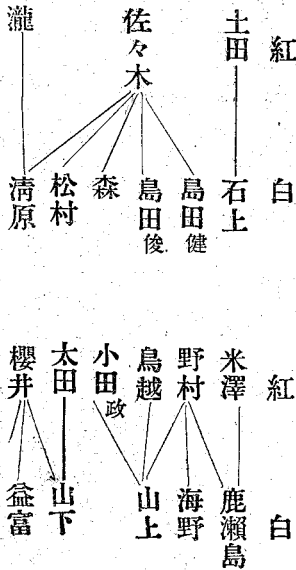
○柔道部秋季紅白大勝負

金行天に澄み、瀨氣地に流れ、碧迢々として匹馬肥ゆる晩秋蘭涼の時、正に是れ、吾人が大に

活動すべきの期にあらずや、あゝ楽しい小春の日和、遊ばんかな、躍らんかな。

“And bring no dook : for this one day we'll give to idleness” あゝ楽しい十月二十四日午後

一時半よりいよゝ龍驤虎搏の大活劇は始まりぬ、新入諸士の氣焰中々盛んに舊部員の意氣亦毫も衰へず、観客は堂に溢れて、窓の外にも犇々どつめかけたる調子、吾人は愉快に楽しく此の半日を暮らしたり、例に依り駄筆を驅つて短評を試みん乎。



者初陣のものとも見えず、先づ足業をかけんとし、土田は脊負を以て到さんせしが共に技未だ熟せずして功を奏せず後には互に突張りて、勝負の程も見えざりければ引分(六分)

佐々木―島田。佐々木は小なれども屈強の体格 嶋田は出づるとすぐに取つてかゝりしも、佐々木が見事の巴投に敗れぬ。

佐々木―島田。嶋田がやさしげに取つてかゝれば、佐々木は又も巴を掛けんせしも体外れければ、島田はすばやく、その隙見かけて壓へ込む、佐々木はムツと起き上りて、堅四方固にと緊め了せぬ。

佐々木―森。苗字に稱はず佐々木は体軀短く、森も亦苗字に似ぬ案外の長漢。勝負如何にと見てあれば佐々木は軽く体を操り、敵の虚に乗じて壓へ込み、崩裂發固にて勝

佐々木―松村。勝ち誇りたる佐々木は、胴へにて一奉。

佐々木―清原。敵を四人まで切り伏せたる紅軍の勇士佐々木は、力盡きて小外刈に刈り倒されぬ、されど君が今日の勳は永く青史に輝かん、瀧―清原。瀧洒たる瀧は体格に於て遙に清原に譲る。先づ敵の倒れしを、ソユのがさじと壓へ込みしも、名に負ふ敵の大力、事ともせず跳ね起されば、瀧も負けじと防ぎ戦ふ、清原は巴をかけて倒さんとせしが、瀧は見事切り脱けたり、こは残念なりと脊負をかけし清原の効は未だ十分とはゆかざりき、かくて勝負も久しきに亘れば遂に引分(五分)因に瀧は新參の身を以てさしもの敵の剛力に甲斐々々しくも當りしに味方の軍も氣強く思ひて見えず。

米澤―鹿瀬島。鹿瀬島は新進熱心の士、小兵の米澤、はやくも釣込足にて釣込まれぬ。

野村―鹿瀬島。野村は丈夫の体、取口も落ち附きたり、なか／＼初めてのものとも見えず、鹿瀬島が軽く進むをねらんで、大斜刈にて見事の鬪。

野村―海野。海野は倭小の体なれども中々の業士、野村は足業にて伐めかけ、海野も負けじとかけし足拂は大分効を奏せしが、遂に巴投にかゝりしは残念。

野村―山上。山上も野村に劣らぬ体格、巴投美事にて山上の勝。

鳥越―山上。鳥越は細長き体なれども業はあり、敵の大力を支へてよくも防ぎ、巴に倒れんとせし餘命をつなきて、再び伐めかゝりしが又もやかくる敵の巴に脆くも敗れぬ。

小田政―山上。小田は忽ち足車にて敵を倒し、其機逸せず見事壓へ込みしが、山上直ちに起き上りしが、其の途端小田が罌丸蹴つて一坐の大笑、双方共思ひ切つて業をかけ、面白き勝負なりしが、遂に引分(六分)

太田―山下。山下は業に方ありて、取口甘し、大田も亦相應の業士、山下の出足拂に見事拂はれしは恨みなり。

櫻井―山下。櫻井は曾つて鍛つた腕前丈けありて取口巧者出づるや否や、巴投かけしが充分にもかず、而も二度目の巴は美事にて山下の負、櫻井―益富。益富は熱心家の一人、年功だけあつて落ち附きたる取口、櫻井が切り込みし、腰車は少し深過ぎて崩れしが(其時自からチエストと叫ひしは滑稽)品代つての背負投は美事なりき。

櫻井―喜多尾。櫻井は勝に乗せて中々の元氣、喜多尾も相似たる体格、業も少くはあり、大外刈に刈り倒さんどせしが、櫻井は美事返して、又もや勝。

櫻井―淺見。櫻井は風邪の身を無理押して、美事三人まで打ち従へ、氣益昂りしが、此度現はれし敵の新手は誰ぞ、力もあれば業も少々はあるといふ淺見、之れには櫻井も少しひるみしが、何かはと最後の勇を振つて、腰車にて伐めかゝりしも、淺見は新手のつはもの、強く切り込む

小外刈にてあはれ勇士の命は殞されぬ、さあれ
櫻井は數度の合戦に深手を被りし身の支ふべく
も見ぬざりしものを案外強く持ちこたへしは味
方も聲を擧げて賞め稱へたり。

阿部―淺見。阿部は体こそ小さけれ、素養のあ
る男、横落にて敵を倒せしは大手柄。

阿部―富川。阿部は甘く体を操つて伐めかけ足
業少し功ありしも未だし、富川は防禦的となり
しが、阿部が機を見ての十字しめにて倒されぬ。
阿部―田島。田島は剛力無双、春季の勝負に大
功を奏して武名隠れもなかりき、されば此度の
合戦にも一花咲かして呉れんと、勇み立つ、相
手は小兵の阿部なれば、早速送足にて拂ひ散ら
したり。

戸倉―田島。戸倉は雲衝くばかりの大丈夫、鼻
下の蓄髭亦一段と風采を高むるに値す、業は未だ
十分ならざる所あれども、力は鼎を扛げんす勢
戸倉の足拂は少し効を奏して「業あり」、こゝを

つけこんで腰へ込まんぞせしが、双方立ち上り
暫時揉み合ひたり、戸倉は右手にて敵の帶をと
りて腰車をかけんとし、田島は左手を出して、
そうはさせじと突張る、戸倉の足拂は充分なら
ざりしも前のごとく合せて一本、戸倉の勝。

戸倉―松本。小兵の松本は、長大なる敵を仰ぎ
見てギョットせしも、氣をとり直して攻め立て
咄嗟の背負投見事にきまりぬ、

野田―松本。野田は肥満の体格なれど、業士の
松本にはかなはざりき、松本の大外刈の奇麗な
りしことよ、兩軍舌を捲いて感心し合ふ。

安藤―松本。松本は背負投をかけんとせしも安
藤さわゆかじと突張る、此度は足拂にて倒さん
とせしも充分ならずして、体崩れければ安藤も
このがさじと、崩袈裟にて固めたれば、松本下
よりあせれど甲斐なく、十秒にて一本、

安藤―西。西は例の固めたる姿勢、出づるとす
ぐ四つに亘りて揉み合ひしが、機を見てかけし西

○の内股安藤に返されて安藤の「業あり」安藤は早

やく壓込にて敵を落さんと攻め立てしも、敵も

さるもの手硬く防ぎ戦ひ「一分で引分け」となり

ぬ、引分けとなるは如何にも残念と、又もや狂ふ

て攻め戦ふ、西は安藤の後をとつて返へせしも

再び壓へ込まれ、必死となりて下より防ぎ支へ

たれば「一分猶豫」となり、兩軍汗を握りて見入

りたりしが、いつのすきにかたりたりけん、西は

下より十字しめにて、安藤が首を落しぬ。

横田―西。双方共低く腰を下げてかゝりしが近

來進歩の跡歴々たる横田は西の襟をとつて腰を

入れんとせしもまだ不十分、西は前の苦闘に稍

勞れたるも意とせず、こゝぞと切りこみし大外

刈力ありしも返へされて敗をとりしは残念。

横田―飯島。今や好丈夫の飯島は、静々と現は

れぬ、あの長き脛にて縦横に曳き廻はされて横

田もしばしもてあませしが、近づく敵の体に機

を逸せず切り込みし脊負投美事、恨みを吞みて

あはれ花は散りつ。

横田―黒田保。劍道に其名鏘々たる新進の勇士

黒田、先づ腰車を以て稍功を奏し、ますます奮て

縦横左右に馳せ廻れば、横田は前二度の合戦に

もイツガナひるむ色なく相應して攻め戦へり、

されどかくては何れに扇の上るべくも見えざれ

ば、後日を期して別れたり(七分)

渡瀬―大内。日頃鍛ひし腕の力試めさんは此時

なりと勇み立ちたる渡瀬、大内は昔は一度鍛つ

た男、低く腰をきり下げて構ゆる處、ひとかた

の敵にあらず、渡瀬は膝車に倒れんとする敵の

虚に乘じ、直に組み伏せ左膝立てゝあはや首搔

き斬らんとせしが、敵もさる者又もや起ち上つ

て向ひたれば、クッ面倒なりと足拂にて見事拂

ひ倒したり。

渡瀬―千原。千原は新進の中にて屈指の業士、

近來意氣頗る盛なり、渡瀬の入れし脊負を返へ

せしは少し功ありしか、次の大外刈にて見事倒

せしは大手柄。

久木山―千原。相撲界の雄鎮たる久木山の老將「鴨なくや弓矢をすてゝ十余年」のそれにはあらねど稽古着捨てゝはや二年、久し振りにど出でませしは多とする所、千原は狂つてかゝれど、こなたもシツカリ身構へして事ともせざる体、千原は巴投にて一本どらんとせしが久木山は甘く切り脱けたり、こはかなわじと千原が組にかゝるを裏をとつて投げ伏せたり。

久木山―村上。体は岩鐵、力は焚臈うこのけといふやうなる村上も、業士の久木山には少々もてあませしが、思切つて捨身をかけしも十分ならず次で膝車にて倒し直に壓へにかゝりしも久木山はすぐど返へして起き上る、村上は又も壓へつくれば久木山は跳ね返し、起きつ倒れつ揉み亂れ、「紅シツカリ」「白シツカリ」の聲一時に湧きかへりたり、村上上になつてしむれば久木山は下より胴をしむ双方解けて久木山は敵

の襟を取りしが又らや倒れて久木山は上より、村上は下よりしめ合ひしが、久木山は遂に十字しめにて剛の敵をぞ組伏せにける。

久木山―三戸。三戸はおどなしき取口、先づ釣込足にて攻めかゝれば、戦ひ勞れし久木山は、今はかなはじと潔く首を渡しけり、
黒瀬弘―三戸。三戸はます／＼落ちつきたる取方、最初内股かけて「業あり」續いて敵の股に手を入れて返したれば、前のと合せて一体で勝、
黒瀬祐―三戸。業士の黒瀬、今日は如何なる風が吹きにしゃ、出づるとすぐ大外刈にて、あれ立派に負くるも負けたるかな。

鷺尾―三戸。鷺尾のやがて雄翼を張らんとするをも待たず、大内刈にて美事三戸の勝、
大村―三戸。牛の如き体を振り立てゝ、ノツンリと現はれたるは紅軍方の鬼將軍、大村一藏とぞ聞えたる、摩利支天の如き力を以て攻つければ流石の三戸も施す術もなく、果ては双方共倒

ッになつて低く睨み合ひたりしが、大村は左手を延ばして敵の帶をとり怪力を以て曳き倒し、ろこのがさじと御得意の壓へ込にかゝる、そうばさせじと三戸が跳ね起くる所を後に廻つて大村が裸しめ一本、嗚呼紅軍の若武者三戸は花々しき戦に四人までの首を搔斬り、又折れ矢盡き見事戦死を遂げしこそは、天晴なれと稱へぬものはなかりけり。

大村―加藤。「酒もすすき餅もすすきなり今朝の春」
撃劔でござれ、柔術でござれ、用捨はないといふ加藤、出づるとすぐに突いてかゝれば流石の大村も辟易せしが、ドッコイと突張つて見れば力も出るもの、双方岩の如く固まりしが、加藤は少しく体を崩して攻め入り、機を見て壓へ込み磐石の如く堅四方に固むれば一秒二秒……十秒、大村は遂に降りぬ。

藤野―加藤。藤野は斯道の熱心家、体力も充分にして技も亦熟し來れり、最初の足拂は効を奏

して「業あり」加藤は後に廻はりて裏をとらんとせしが、藤野はこゝぞと腰車を入れて捻じ倒し、すぐさま取つて壓ゆれば加藤は下より返へして立ち上る。藤野は勇を振つて攻めかけ、又もやかけたる得意の足拂「業あり」合せて一本。
藤野―梶原。梶原は新進の血氣盛んに、流石の敵も物かはといひざまに、体落にて投げつけたるは天晴れ。

柴田―梶原。業士の柴田もこの剛の者に向つては施す術もなかりけん大外刈に刈り倒されたり大島―梶原。柔道界の名物男大島は現はれぬ、梶原は打ち見て、この生白の小雑兵一揉みにして呉れんすと、腰身深く切り込みしもさはさせじと見事きり脱けし大島、つづいて大外刈に刈り倒せばドットばかりに大の男は疊を負いぬ。
大島―廣田。紅軍の廣田は名代の業士、腰をさげてかゝつて來る時は一段と剛の者、今日は元氣よく、滑稽じみて跳つてかゝりしが、腰は。

相變らず低く構へたり、大島は御得意の大外刈
三三度試みしも充分ゆかず、廣田はこゝを先途
と防ぎ戦へば大島も少々もてあまして見ゆたり
「一分で引分け」の命下るや双方汗を絞りて狂
うてかゝれど、久しき間の苦闘に兩勇士疲れた
れば、またの日をこて遂に引分(七分)

鈴木彌一永原。相對して破顔一笑、武士の戦場
に臨むはかくころあらまほしけれ、剛氣の鈴木、
氣鋭の永原、思ひきつたる勝負なれば、なかく
に面白く、鈴木は脊負にて倒さんと攻めかけし
も、業士の永原軽く身を外らして切りぬけたれ
ど、こは殘念なりと、此度は拂腰一本美事の御
手並。

鈴木一佐藤。悠々罷り出でたるは白軍方の勇士
佐藤と名乗つたり、丈こそ鈴木に劣れ丈夫な体
、先づ攻めかくる御手は、例の脊負！、こゝな來
れど鈴木は裏をとつて投げしが、其の途端佐藤
は激げしく頭部を打ちたりけん、暫時身動きも

せざりければ、一坐のものの心配せしも幸ひあま
りひどくもなく、水を入れて暫時氣を静めて、
復も立ち向ふ、鈴木は卷込み仆さんせしも十
分ならず、佐藤の脊負落は稍功ありて「業あり」
續いて脊負をとらんとせしが裏投にて敗となり
ぬ。

鈴木一田原。勝負も次第に時を移して、今ぞ見
所！兩軍片唾を吞んで凝視したり、敵も剛者な
れば田原も用心怠らず、腰を引いてぞ立ち向ひ
脊負をかけしも敵の体遠ざかりたれば崩れてた
をる、鈴木は起き上るを待て御得意の裏投げや
らんと構へしが、其手は桑名の焼蛤、田原はソ
ット脱けて、又も立ち廻る、其の勇ましさ、花
々しさ！、頓て体落にて見事田原の勝。
福田重一田原。田原の元氣中々盛ん、又もや体
落にて福田を倒しぬ、あはれ勝負は時の運、春季
の勝負には五人まで投げつけし勇士福田も今日
の敗北に怨を吞みて退陣しけり。

松隈―田原。双方其名にし負ふ美士の組合ひ、之を今日の勝負の花―、見よ其体のこなしの奇麗さ、業の迅さ、或は高く或は低く、切つて廻はせば天地も轟かんばかりの喝來、田原は左腰を入れんとすれば、松隈は巴投にてとらんす、田原が切り込む腰の激しさに、松隈も防ぎあぐみて喘ぎ出せしが、最後掉尾の大腰にて美事に敵を投げしは大手柄。

松隈―永松。雲衝くばかりの大男、仁王立に立ちたるは之ぞ白軍の豪勇永松なり、近來病氣の爲め衰へしとかなれども、まだ中々元氣、松隈もしばしもてあませし様なりしも、御得意の脊負にて攻めつけしが、力足らずして崩れぬ、永松は大腰を入れしが松隈は見事返へして「業あり」又もや脊負をかけしがくづれて倒る、永松は直に壓へつけんとせしもサット跳る起きたる松隈の早業、或は仆れ或は起き、上を下へと揉み合ひ、勝負の果の見わざれば「一分で引分」此の

命と共に「紅ッ」「白ッ」の聲四方に湧いて勇氣を鼓舞せしが、何しろ永き間の争闘に兩勇士疲れれば殘念ながら引分にて、靜々駒を返へしたり(八分)

石河―鈴木。寢業の名人にて名を打つたる石河、何時御手が出るかと皆待ちかまへたりしが、出づると直に足拂ひをかけし途端諸倒れに倒れしか、すばやく後を取る暇もあらばこそ、襟締一本、鈴木は思はぬ敗をとりて退きしは殘念、

石河―貝塚。白軍の副將熊本中學にて柔道界の雄鎮たりし貝塚、体驅雄大豪力無双、御得意の大腰は評判もの、石河も之にかゝつて飛ばされぬ。

惠利―貝塚。惠利は堅實なる取口、敵が名に負ふ剛の者なれば、用心をさくゝ怠らず腰を下げて立ち向ひたり、貝塚も低くかゝつて四つに組みしが、惠利は左膝折つて左右なく立たず、しばし機を見て立るや咄差に膝車一本試みしが稍功

あり、續いて加ふる足拂二ツ三ツ、されど貝塚は毫も屈せず怪力を振つて敵の左腰を探れど、惠利が又もや左膝を折つて構ゆるに小癢なりといひ様取つて壓へんとし、後より襟をどりしも惠利は直に之を振り切つて立ち上り、右手を延して貝塚の帯をとれば、貝塚は左手にて惠利の襟をとる、互に機を窺つて相睥睨せる時、正に是れ双龍珠を深潭に争ふて雲乘然として起り、急雨將に至らんとして風樓に滿るの概あり、されば兩軍聲を吞て勝負如何にと諦視す。貝塚は氣を苛ち右手を出して大こしに釣り込んどせしも惠利は甘くも之を外せば「紅シツカリ」つ叫び湧くが如し、貝塚は敵か休落をかけ損じ倒れしに乘じ早くも壓へ込んど努めしも惠利は又もや之を振り解きて跳ね起きつ、足拂二三度、攻めに攻めかゝる、斯て右突左聘、鎬を削りて奮戦すれば、いつかは勝負の程も知れざれば遂に引分の令下り、兩勇士は喝采聲裡に悠々と退きぬ。(十五分)

田中。中光。田中は福岡天真館にて多年鍛ひ上げたる勇士、此の日紅軍の副將として現はれぬ白軍の副將貝塚は矢を被りて退陣しければいよく御大將中光御出馬と相成りたり、田中は脊負投げ外刈など連發して攻勢を取りしが最後の足拂見ごと効を奏して中光は倒れぬ。斯くて白旗空しく地に委して紅旗の長へに翻々たるを見る。

田中。丸田。紅軍の大將丸田は出陣に及ばずして事平らぎたれば御好みといふ處にて田中と組み合ひたり、之れは大外刈にて丸田の勝。

三本抜き終りて賞品授與、其の後は例の茶菓の饗、散會せしは五時を過ぐる三十分。

當日昇級及編入を行ふ、左の如し、

昇級者

松隈匡輔、田原純一、

右三級甲へ

大島春海

右三級乙へ

藤野 幹、廣田行圓

右四級甲へ

編入者

田中誠吉、貝塚 正

右三級甲へ

岡山 寛

右三級乙へ

梶原吉人、大村一藏、千原誠郷、櫻井時雄

右四級乙へ

三戸薫樹、村上 藏、黒田保吉、阿部慶輔、大内重美

山上猛虎、鳥越貞治、海野得志、太田作次郎

右五級甲へ

山下謙一、喜多尾秀治、小田政五郎、牛嶋航、戸倉精吾

佐々木文平、鹿瀬島政治、池澤利之助、石上潜

右五級乙へ

其他は六級へ編入

當日黒帶授與せられしものは

廣田誠吉、貝塚正、岡山寛、藤野幹、廣田行圓

(委員投)

○劍術部秋期大會

秋正に闌けて、壯士肉躍り骨鳴るを覺ゆ、世は

滿州問題に霧々を極めたる際、晴亮の氣と殺伐の風雲とは凝て一團の元氣となり、我が劍術部の秋期大會は、終始勇ましき劔撃の響と拍手喝采との裡に紅白軍の決戦を試む、維時明治卅六年十月卅日、來賓席には櫻井校長あり、兒島部長審判官着席、午後第一時半より五十余名の大会戦を演ず、而も紙白の都合により乍遺憾其の短評は後卷に譲り、茲には單に勝負の一覽表を舉ぐる事とせむ、

紅軍

白軍

堀江

○長川谷

勝丸

堤

○山本

○○○坂井

月黒

○長野

久木山

○上野

宮崎

青木

布田

○芦田

○高橋

○○福田

○藤岡
○團野
波江
○黑野
○矢野
○福間
○長松
○梶原
○中山
○鹿兒島
○鹿瀨島
○水上
○平井
○原(周)
○分余田
○原(一)
○稻波

村上
藤岡
柴田
西山
○佐々木
○瀬口
○松野
○大淵
○谷
井上
○小中
田代
○陶山
倉岡
○薩山
○坂本
○高木
○中山

河東
園田
久保
川内
○小泉
荻野
野中
○福山
黑田(保)
足立
黑田
空閑
河東
田島
渡邊
鹽見
鈴木
石丸
大塚
林
加藤
宮山
松枝
有田

進級の部
三級甲に
田代昌吉 伊吹已代二 石野斐雄 稻波實
三級乙に
石川登 小中垣行 田口環
四級乙に
大淵朴 永上七郎

編入の部

三級甲に

黒田保吉 野中 園田

三級乙に

坂本 川田 渡邊

四級甲に

原(聰) 河東 中山(豐) 久保

四級乙に

陶山 原(周) 田代 鹿瀬島 饒島 井上 中山(蘭) 糸田
倉岡 瀬口 佐々木 黒野 藤岡 布田 阪井

以下は總て五級に

○弓術部秋季大會

十月廿五日、松樹蔭鬱、風籟含韻の處に於て、弓術部秋季大會は開催せられぬ。東師範、岡野、松本、久米の四先生を始め、部員三十五名の出席あり午後〇時三十分、委員立つて開會の挨拶をなし、次に的に對する順序を定めたり。既にして、五色的は安土に置かれぬ。浦本君先づ最初の矢を放ちしが、忽ち赤的の真中に命中した

り。次に太田君立ちて瘦せた四肢に力をこめて矢を放ちしが中らざりき。

五人射損じたる後に伊藤君立てり。君、思へらく、余未だ甚だしく此技に長じたるにはあらねども、何ぞ人の後へに瞠若たらんやと。十分に弓を引つ絞り、狙ひ定めて放ちし矢は過たず青的を貫けり。拍手喝采雷の如し。

乙矢を番へ静々と立つて的に對ひし黒野君、いさこの度ころは、輝く黄金色の真的真只中を射遂げてくれんと。全身の力を其の一矢に委ね、狙ひ定めて切つて放ちしが、忽ち金的に音して、見事に功を奏しける、これを見てあたりのたれかれしたりやくと褒め稱へたり。

黒白の二的尙はあり。既に三的も人に射させし腑甲斐なさ、戦國の昔ならば腹を屠つて死すべきにいざ御覽あれ。この度は余こそ射遂げ申さめど立ち上りしは太田君なり。君の矢忽ち黒的

を射貫きぬ。さればたゞ一つ残れる白的、いとも射よげに見えければ三人次ぎ々に射たりしも中らざりき。堀君、余こゝ射めと決心し、恭しく構へ力まかせに弓を絞りぬ。あはれ、放ちし矢は忽ち中りて聲あり。

こゝに、五色的は總て射落されしかば、的中者に賞品を授與せられぬ。

さて、分附をなすべく七寸の小的安土に据へられぬ。交る々々矢を放つて、余こゝ最後の勝利を得めと争ひしが、小的のことゝて意に任せず、一分も得ざりし人いと多かりき。

今日の分附に五分の的中を得しを最とす。得し者を誰とかなす。曰く委員岩佐君其の人なり。君立ちて的に對し、狙ひ定めて射放ちし第一、二、三矢は中らずして的の極めて近くにどゞまれり。然も之を意とせず、偏に心を静め氣を平かにして射たり。君は今第四矢を番へ弓を執つて

立てり。見よ、今全力を注ぎ全心を込めたる矢は放たれんとす。あゝ何たる偉觀よ、バツと矢を切り放ち左右の手を後方に、少しくそらして的をみつめつゝある風姿の、如何に壯なるよ。矢はみごと命中せり。かくて君は第、七、八、九矢悉く成功せり。

三分の功を得し者五人あり。即ち東師範、浦本、進藤、中島、藤田の四君なり、五人中、いづれが勝れるか、之を競射に問ふことゝなりぬ。

浦本君まづ射る。勃々たる野心を膺の下に推し静めて、無我無念ばつと放ちし矢の見事中れば。よくも中てけるかなと一同拍手せり。次に出でしは進藤君なり。君や稽古の日尙は淺きも其熱心と、其研究とによりやう技熟せり、射るや忽ち命中したり。東師範、虚心平氣、矢を放ち給ふや、忽ち叫ぶ矢取りの聲。次にあらはれしは中島君なり。君は既に稽古を積むこと久し。靜かに武者振り勇ましき、こゝをど切り放つ矢は過たず中

れり。次に、新部員中や、腕利きの士、藤田君射しも僅かに外れて中らず。

あゝ如何にこの競射の結果の美なるよ、壯なるよ。今や四人は再び立つて勝を争はざるべからず。浦本君、心を込めて射るや忽ち中りと矢取りの聲。次に東師範と進藤中島の二君と負けじ劣らじと力を振つて射しも中らざりき。

分附の結果により等を附すること左の如し。

壹等(五分)岩佐君	貳等(三分)浦本君
參等(三分)中島君	四等(三分)進藤君
五等(三分)東先生	六等(三分)藤田君
七等(二分)太田君	八等(二分)堅田君
九等(二分)守中君	十等(二分)富田君
士等(二分)河東君	士等(二分)工藤君

賞品の授與終るや、射割に移りぬ。

いと小さき酌は安土に立てられぬ。さきの耻辱を雪がんは正に此一擧に在りと覺悟して、交るゝ注意して發射せしが間には、僅々二三分に

とて思はるゝ近矢ありて、あはれ射たりやなど、眼を驚かし心を狂せしむるものもありき。

かくて十二人失敗せし後、戸次君ぞ立ち對ひける。いざと決心の臍を固め、弓をひき絞り、思ひきつてヒョーと放ちし矢は中れり、忽ち拍手喝采湧くが如し。

更に的は置かれたり。二十餘名功名を争ひしも得ず、時に東師範立ち出で給ひ、諸子よ、あれしきのもの射遂げ能はすして如何せらるゝ、さゝ御覽あれよと、十分に弓弦引きて放たれし矢は過たず中れり。香しく薫れる白花紫瓣前後に散亂し、美しき清けき黃菊紅葉左右に狼籍たり。一同賛歎の聲しばし止まらず。これより出席者を二分して源平競射を行ひしが、其の結果同等なりき。

茶菓の饗應などありて一同散會せしは六時過ぐる頃なりし。時に夕陽殘んの光をなげて、松の葉枝を彩り、龍田嵐さつと吹き、爽快いふば

かりなかりき。

當日部員の昇級編入ありしは左の如し、

(五級)

中島三代彦

右四級に昇級す

(六級)

高木 善人

右五級に昇級す

(級外)

藤田 三郎

浦本 貞陽

右五級に編入す

(級外)

波江 弟夫

守 中 清

吉 田 勉

草葉 義夫

仁科 重義

吉 勉 田

河東卓四郎

黒野 勘六

右六級に編入す

(忠堂)

○法科生懇話會

二月廿二日の夜催はせし在寮法科生懇話會の演題と辨士と左の如し。

進取的精神と保守

希望の光

生山 昌治君

西村 卯君

八十二

獨創的思想の修養

所謂下等社會に就て

讀書 論

感情に就て

好機逸する勿れ

學寮に於ける法科生

時代の聲

新式の封建制度

二種的人物

新庄祐次郎君

千原 誠卿君

山本 長繼君

松原 恒二君

矢野 恕君

磯野悌三郎君

熊谷彌兵衛君

福富宇一郎君

池田 秀雄君

○演說練習會

近來龍南會各部の飛躍は非常なるものなるが、就中我が演說部に於ては、毎回出演希望者の過半は、時間の許さざると、開會度數の少なさとの爲め、其希望を果す能はざる有様なり。されば此際一つには是等演說希望者の意を満足せしめんが爲め、一つには眞摯なる研究的態度を取らんが爲め、演說練習會なるものを起せり。來

るものは拒まず去るものは逐はざるの方針にて
遠山演説部長も大に賛同せられ多年研究せられ
たる演説法を以て指導せんことの意を致され
り。

第一回

朋友論

一、瀧 正雄君

競争と協同

全 山内 巖雄君

政治主義の誤謬

一、二工藤 忠輔君

東方策

全 佐々木茂枝君

喇叭の響

一、三高木 善人君

第二回

國民的趣味

一、比嘉 財定君

我帝國主義

全 高武 公美君

勝者の資格

全 西村 卯君

文明界に對する日本の責任 全中溝 庄三君

愛國心と常識

全 井上 清吉君

武裝的平和

一、二松原 恒二君

我真の敵は背面にあり 全 和氣彌七郎君

○赤門だより

秋風は九州の土にも吹き渡りて廣茫たる東肥の
原野は今や紅葉黄萩の詩觀を現出し候事と存候
こゝ都の地にも秋の哀れは洩れずして他郷遊子
の心を動かし申候随つて想起すは過去の三星霜
我を容れ我を育てし龍南の天地に御座候我が親
愛なる諸師諸兄の消息如何に候や

扨て小生は此夏の末つ方戀しき故郷の胸を脱し
種々の想像を頭の描くに任せつゝ上京初めて音
に聞さし赤門をぐぐり文科大學英文學科へ入り
申し候就ては文科の學事模様不完全ながら大畧
小生所屬の學科に就き御報導申上可く候先づ其
の所修學科は左の如くに御座候

哲學概論(ケーベル氏)

四時間

英文學

一、英文學史(ロイド)

二時間

一、英詩(ロイド)

三時間

一、小説(ロイド)

一時間

一、戲曲(夏目氏)

三時間

一、英詩(上田敏氏)〓隨意科

二時間

英語(スウキット氏)〓隨意科

二時間

獨語(上田整次郎氏)

三時間

佛語(バーフ氏)〓選擇科(史學に對し)

三時間

羅典語(エック氏)

三時間

時間割は左の如くに御座候

時	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4
月	佛	佛	英語	英語	英語	詩(ロイ)	詩(ロイ)	詩(全)	獨逸	獨逸
火	佛	哲學	戲曲	哲學	戲曲	英語文學史	英語文學史	詩(ロイ)	詩(上田)	詩(上田)
水	佛	羅典	哲學	戲曲	英語文學史	文學史	文學史	小説	獨逸	獨逸
木	佛	羅典	哲學	戲曲	英語文學史	文學史	文學史	小説	獨逸	獨逸
金	佛	羅典	哲學	戲曲	英語文學史	文學史	文學史	小説	獨逸	獨逸
土	佛	羅典	哲學	戲曲	英語文學史	文學史	文學史	小説	獨逸	獨逸

英文學史は筆記にして英文學科一、二、三年生及び他學科三年生合併に御座候三年にて完結に候へば詳細なるは推して知る可く候今學年はミルトンより初り申候、ロイド氏は英國人にして文科大學講師たる傍ら海軍大學教授にて候發音明

晰流暢にして耳心地よく御座候ビツチは少々早く候間後にて筆記帳の訂正補填必要に御座候併し實は此位のビツチが適度かと存じ候講述者の方にて少し早や過ぎる其れを筆記者が聞き落すまじと努むる其時に耳は鋭敏となるものなれば少々早や過ぎる方が却て宜しき故此位は寧ろ適度と存じ候小生は此の書取の時間は愉快なる時間の一と致し居り候

英詩(ロイド氏の)は英文學科一、二、三年生に向て同時に講義せられ文學史の方と步調を保て進行致し候只今文學史の方にてミルトンをやり候に付詩の方にてミルトンをやり申し候但し此れは書籍に就て講義するに非ず毎時間講師よりプリントを配賦被致候經濟上至極好都合に御座候併し其の時間に配賦せらるゝ故下調べ出來ず從つて自然聞き落し勝ちにて閉口致候

小説も毎時間にプリントを配附せられ候只今は

之れも矢張英國革命時代のジョン、イングルサ
 ンドの小説に御座候ロイド氏の講義は以上丈に
 候氏は頭上既に白雪を宿され候が魁偉なる体格
 快活なる氣分尙ほ青春の士を凌ぎ申し候其の腹
 部の肥滿して突出せる様は徳利の如く急用の折
 などは直立して急行せんより芋の如くころんで
 行かん方却て早からんかと思われ申し候顔色赤
 きこと赤胡椒の如く眼光鋭き事鷹の如く一見恐
 ろしき様に候へども快活にして愛嬌ダツプリの
 お爺さんに候日本語に堪能にして單語の説明な
 ど日本語にてされる事屢々有之候ロイド氏と前
 の小泉八雲とを比較せんに上級生諸氏に就て聞
 けば小泉氏は語學の如きは全く眼中に置かず重
 きを趣味の涵養評論の練習に置かれ候由然に
 ロイドは斯かる点に力を注がるゝ事は爾く著し
 からず寧ろ字義の説明和文英譯などの方に注意
 せられるようなる形跡有之リンギスチックパワ
 ーズをつけるには宜敷候へ共リテラリーアビリ

チーズの養成には左程にもなきかと存じ候
 戲曲はセキスピア悲劇マクベスを夏目氏講義せ
 られ候之れは文科一年各學科に向つての講義
 にて候一は作物其ものと面白きと一つは講義の
 趣味多きとに依り聽講者甚だ多く御座候廣く諸
 大家の説を引用し來り加ふるに先生の得意なる
 心理學上の見識を加へて詳説細論し屢々頓智な
 る滑稽を交へて講義を賑わせれ聽講者をして時
 間の過ぐるの早きを歎せしめ候先生は此外尙ほ
 三時間二、三年に向つて「英文學の組織」を講述
 せられ候

英詩(上田敏氏の)は隨意科なると時間の都合惡
 しきとに依り聽講者至て少く候併し聽講者少し
 とて其の爲め講義の價値は決して減する者には
 無之候初はチョーサーのカンタベリーテールズ
 の序歌を講義せられしが只今は之を止めて同講
 師の編纂にして丸善出版なるヴィクトリアン、
 ラアーなる近世英詩の粹なるものを含む詩集を

講義せられ候此詩集に收むる所はフヒツデラルド、ロゼツチー、スウキンバーン、キツブリング等の詩にして目下講義せられつゝあるはフヒツデラルドが譯して近世英國の詩界に一異彩を放ちし波斯詩人オマーカイヤムの詩に御座候此詩の形は漢詩の如く四行より成り一、二、四行押韻し一種珍らしき趣味有之候其の歌ぬ所は作者の人生觀にして大いに樂天主義を鼓吹せるものにて句々皆な之れ金玉の句にして痛快なる詩に御坐候上田講師は泰西の古典に精通せらるゝ學者にして常に古典に通ぜされば近世の文學も眞に之を咀嚼玩味することの不可能なることを説かれ其の講義せらるゝに當てや引証該博趣味津津として盡き不申候其の俊才たるの面影は其の容貌に其の講義振りに現はれ居り候

英文學の講義は是丈に候が夏目上田兩講師の講義は共に價値多き講義に御坐候次に

英語(スウキフト氏)之れも隨意科に候月曜には

コナンドイル作小説アンクルベルナツクのリデングの稽古水曜には自由會話に御座候其外隨意の題にて毎週一篇づゝの英文文を出さしめられ候出席者は常に十人足らずに候併し會話には出席者少き方が却て好都合に御座候

獨語アアヘンヅロソフ著マルモールビルトをやり申し候

佛語聽講者は遠く法、工、理の諸大學よりも大勢來り驚くべき人數と相成り申し候朝七時よりなるには今後の氣候には閉口に候

羅典一週間僅か三時間なれ共一番骨折れるは之にて候之れは毎時間學生の方よりエキサーサイスをやる事にあり候が羅典其物の面倒なると教師の嚴格にして精密なる下調べの必要なるため一時間のエキサーサイスに對する下調べに四時間を費し目下殆んど羅典を稽古せんがために英文科に入りしような姿に御坐候尤も鋭敏なる人には下調べに斯かる多大の時間を要する事無か

るべく候へ共少くとも愚鈍なる小生にはそれ丈必要に御坐候併し閉口せらるゝは矢張小生獨りに限らず先達の如きは我は羅典習ひに英文科には來らざりしに嘆聲を洩らし居られし人も有之申し候但し此れは獨、佛、英文科及び言語學科合併にてやり申し候

哲學概論ケーベル氏の高名を聞きて一時聽講者多く有之候らしいしもブロークンイングリツシエとローボイスにてなさるゝ講義の不可解なるに驚き今は餘程熱心家ならずんば出席せざる由欠席勝なる小生は承り申し候但し後日プリント配賦せらるゝ故試験には心配なき由に候

所脩學科は以上丈に御坐候大學には出欠の調査も無之下調べとても左程にも無之候へば勉強家には自己所好の研究をなささんがために遊び好きの人には遊ばんために何れにしても至極好都合に御坐候併し勉強するも不勉強するも各々其れ相當の結果に因て伴はるべく候へば申すまでも

無之候へども好都合と云ふを遊惰の方に應用せんは由しき誤見なるべく候

十一月十二日文科大學の園遊會吾妻橋畔札幌ビール會社構内舊佐竹侯爵邸内にて催ふせられ候來會者百四五十人に登り非常なる盛會にて有之候午前十時開會大神樂、落語などの餘興あり十一時半より庭内各店の開初にてオデン、ソバ、テンプラ、シルコ、さてはスシさては牛乳と教授學生打混じ各店へ襲ひかけて食ふ所如何にも無邪氣にして睦じく見へ申し候午後三時より會食、食堂に至れば一望眼の達する限り雪白のテーブルクローズの上ビール泡立ち洋食匂ひさもテンブチンクリリーに吾人の來るを待ち居り候一同着席の上大塚教授の開會の辭を初めとし山川總長、井上學長、建部姉崎諸博士及學生の演説、佛人エック氏、伊太利人ノルサ氏の自國々歌の朗吟などあり一同充分の歡樂と満足の内散會せしは午後四時にて有之候以上御仰せに従ひ不完

全ながら御報導申上候勿々

十一月十四日

X 生

○駒場だより

從來五高からこの駒場に入學したるものは數へるに足らぬ、時には皆無の年すら少なくなかつた様だ、赤門の方は無論先輩も多く、従つてゝの便に接することが頻々であるのは、小生も経験した一人である、然るに獨り駒場に至つては全くそれがなかつたので、農科志望者は遺憾に思つた事もあつた、今年は甚麼風の吹き廻しか農學科に六人、農藝化學科に一人、林學科に三人、都合十人と云ふ多數の五高出身者の入學を見た、曰はゞ空前である、それに以後も多少の當大學志望者を出すには違ひないから、或はそれ等諸君の參考の一端にも、がらにない筆を取つたのである。

農科大學を照會するには先づ始業前の模様(少

なくとも小生獨りの經驗せし)を述べやう、次には地所校舎に就きて、最後に二三教職の講義に對して概評(とは氣取り過ぎで、失敬で、台つれたかも知れぬが)をやつて見よう、而し入學以來日は淺し、全駒に亘つて正鵠を得た深刻な透徹した觀察を得んことは不可能である、只簡單なる部分觀察で、而もそれが當を得て居るか否かは自分ながら怪しまるゝ程である、

九月十一日に新學年を開始するのは勿論である、うこで小生は先大學に通ふ道筋位は覺て置く必要があると思ふて、着京の翌日一寸見訪ふた、當大學は昔し農林學校と稱へて居た時代の建物ゝのまゝなのが少なくないので、實に粗造極まるものがある、然し地域は非常に廣濶で當初は方角にも迷つたのであるが馴れて見ればこんな simple な處をと氣耻しくなるのは御互様! 愈十一日には宣誓式があることだらうと必構へて本

郷の方に行つて見るとろんな様子も見へぬ。迷ふは勿論小生獨りでないから何うだ」と聞いて見ると宣誓式は果して當日であるか式場には正

帽正服でなければならぬか在學證書差出の期日は何日か、知つた御方が一人もない。のみならず自身が果して入學が叶つて居るかすら判然せぬのだ。かゝる事は吾々を紳士視(?)して自由を與へて置くと云ふ大學の積りかも知れぬが、一切勝手を知らぬものにはまるで五里霧中である。後で聞けば宣誓式は十月十日に、各科一同赤門の方で行はれ式場では正服正帽が要である、在學證書は九月二十五日迄に出し許可證の如きは別段與へぬ、一口で言はば放任である、授業始めも當大學ころ片ばかりとは云へ、十一日より開始したれ、赤門の方では多くは十四五日頃、甚しきは二十日を過ぐるものもある、そこで來た當時は彼れ是れと心配する必要は全くない、要はズルク構へるにありだ。昨年入學したもので

末だ宣誓簿に署名して居ないものがあるを聞いたら小生が云ふ處決して妥當を欠いで居ないと首肯さるゝであらう、何々。

當大學は實習場植物園見本園模範林家蓄飼養所までお百姓向きに至れり盡せりであるから、地域は馬鹿に廣いが建物は改築された二三を除いては何れもくこと實にお氣の毒な程御粗末である、石川博士がレクチュアーニ臨まれて「この學校は日本中で一番汚は學校であるから、雨も遠慮なしに漏るので講義するものは先づ可いとして座つて聞かれる諸君が困るだらう」と云はれたのは愛嬌とは言へ大概が推せられるではないか、然し片端から改築中であるから三四年を出でずして昔日の面影を一新するであらう。教官は姓のイロハ順におならびを願ふことにした。

石川教授。動物生理學の受持吾々は早くから先生の名を聞いて居る、一は博士としての名の

ボツチャン的なるにもよらんか、兎に角その名は斯界に噴々たるものがあるは云ふまでもない、博士は元來口早で且つ話頭が前後錯綜することがあるので、筆記は甚だ困却する或は胸中蘊蓄が多いのであれも云ひこれも云はんとするによるか、兎に角レクチュアーはあまり御上手でないのだ。これは博士も自覺して居らるゝと見えて「私は講義かまづいから筆記に困られるだらうけれども……」と氣の毒がられるのも氣の毒！

池野助教授。植物生理學の受持。秩序が整然で連絡が明かであるから早い講義にも干はらず何の苦もなく筆記が出来る、蓋しレクチュアーと來たらば當大學の白眉であらう。強て惡まれ口をたゞけば音聲があまりに宜しくないども云ふうか。

ロイプ教授。植物生理學(化學的)の受持。先生はもと西國は獨逸の產鉢驅矮小なるドクトルであ

る。レクチュアーは英語でやらるゝ先生が教場に現るゝや開口先づチュントルメン(tenlemen)がお定まりである、講義は熱心にして且つ丁寧を盡して居ることも云つて宜からう。而し發音の奇異なる間々聽者を苦しむるものがある。例へばウントテン(audien)ウンターシターエン(understand)オン(one)フングダウン(hungdown)の如き。

原助教授。農場實習受持。最初の日は雨に降られたにも拘らず畑に引き出された。誰しも仕事着の用意に氣が付かなかつたので長裾長袖のお百姓十八名、鍬を執つて畑中に立つた宛として灌佛會の釋迦である。此の時に當つて誰れか多少の不平なからんやだ。かくて雨中に立つこと廿分間ばかりにして「雨がやませぬやうですから今日はこれ止しておきませう」と聞た時はまるで天使の御聲、それに「實科生が手作の葡萄酒がある、未だ充分味は付いて居ないが私の應接間

に用意してゐるから一盃やり給へ」と云はれては、以前の不平は何處へやら満面に掩ひ難き嬉色を浮べて居たやうだ、元來先生は城壁を設けることなく何事に限らずよく話して呉れる所謂「如才ない男」と云ふ方であらう。

和田垣教授。經濟學の受持。先生の名は博士として高きのみならず諧謔を以て普ねく聞こゑて居る。授業が開始されて一ヶ月計りで始めて一時間講義を聞かされた。而しその一時間に經濟と云ふ二字の解釋すら終らなかつた。その筈である、和田垣謙三なる者を第三者とするとの御斷りの下に文學士法學博士なる學位の披露、文部省書記官たりし當時の追想談、著書の廣告その他滑稽洒落口を衝て送りそのbranchの多くして且つ長きに亘る、一寸木に譬へたらば枝垂柳である、而し枝葉は如何に多くとも枝垂柳は枝垂柳である、木に竹を嗣いだやうな事はないから、調子が付いて系統が立つて宛然一場の講談

を聞くが如くである、先生のスタイルはサッペロビール廣告人形その儘をcontingentしたやうだ、而し偉大なる軀軀便々たる腹筒一見非凡に感ずる。

脇水助教授。地質學受持。先生のレクチュア―は聲が低くおとなしくお話し風で、筆記は容易である慾を言へば今少し活氣がほしい！、

佐々木教授。昆虫學の受持。態度も講義も特長なく欠点なし、所謂可もなく不可もなしとは先生のことであらう。

北尾教授。農藝物理の受持、聞説く先生は弱冠にして獨逸に留學し専ら彼の國にありて研究したれば、日本語の新聞は近頃に至りて僅に讀み得る位だとか、而し理學博士高等官等壹給俸と云ふゑらいものだ、丈は高くはないが髭髯は美しいし鼻眼鏡は似合ふし、フロツクコート着流しのスタイルに厭味のないのと合せて好箇の學者風である。肩書と見榮ばかりではない。實

愛生

○赤門より龍南の諸兄へ

際博士の名は學術界に於て洋の東西に響いたものだ。而し惜むらくは好漢歩行の自在と便給を得ぬ。歩行は病阿の結果であるとか、その囁囁にして且つ日本語をやつることのまづきは、聽溝者の尤も遺憾とする所で一時間の間空しく教壇上に右に左に無邪氣に運動する、一箇の鍵なき寶庫を眺むるとさうある。

白井助教授。植物病理學の受持。獨逸に於ける過去出來事によりて今猶ほ先生の名を記憶して居るであらう。

麻生助教授。屁もひらず沈香も焚かぬ化學實驗の受持、

森助教授。肥料論の受授。極力ノートを見詰めてそれを言文一致体に讀むのが、先生の得意だそれでスバラシイ早いが分らぬ事はない。而し手の遅い人は筆記に後れることはある。兎に角糞尿穿鑿だから聞くも臭いなんてろんなるを言ふものはお百姓様となる資格のないものだ。教

馬嘶白日暮。劍鳴秋氣來。と咏じけむ、秋は今深く相成候。おもふ、白水河畔の暮色轉々吟骨を清うするものあるべく、龍南學舎の諸兄意氣益々旺盛なるべしと察し奉り候。今大學内に於ける學事の模様及び二三感じたる事共御報申上くべく候。入校以來日尙は淺く、觀察の及ばざるところ、はた謬まれるところも多々これあるべく候らへば、何卒その御心持にて御覽被下度候。又申すところは文科のみにて、また他の分科に及ばず、文科の中にも國文の方主となるべく候。これは筆者の籍のあるところ自ら止むを得ざる所にて候。

まづ第一に日頃接したる諸先生の棚下しを仕らむ。

村上專精博士の東洋哲學、これは小生は四五

度も盗み聞きに參り候らひしが、頗るおもしろく御坐候。極力佛教を辯護して、佛教は他の宗教の如く客觀的のものにあらず、主觀的のものなり、自己の心以外に神なるものゝ存在を認めずといひ。又佛教は此世に苦痛あるを認むること共に快樂もまた存在することを認む、苦痛を減して快樂を獲むとするものなり。世人、のみならず佛教徒自身すらも、佛教を觀じて厭世教なりといふは誤まれりと、赤兒に物を嚙んで喰はせる様に講義致され候故そのいふ所、かの似而非僧侶の思ひも及ばざる所にて候。流石は佛教統一論を著はして、當時の佛教界を動搖せしめし宗教界の大立物だけに、所説一々重味ある様に感ぜられ候。只、流石の先生も、尙ほ、一般の宗教家と同じく偏屈なるを免るゝ能はざるか、局外者より見れば、我田引水的なるやにおもはるゝふしなきに候らはず。曰、基督や孔子やを、我が釋尊と共に論せむは、尙ほ衆星と太陽とを

比較するが如し。太陽一度出づれば衆星悉く其の光を失ふ、と聴衆呆然。又曰、諸君の内我が釋迦を崇めて釋尊と呼ぶを非議する人あらむか、されどおもへ、日露開戦するに當りて、(とんだ所に日露開戦もあつたもの哉)、日本人の中一人でも露に肩をもつて、彼れ勝つならむといふものあるまじ。佛教徒が教祖を尊んで釋尊といふ、何の不思議がある、と、意氣頗る軒昂。

姉崎博士の宗教學も二三度拜聴致し候。先生色淺黒く、漆の如き美髯を蓄へ、背丈は高く、音聲は朗らか、まづ當世紳士の摸型ならむか。いつも一二冊の本はホツケツトより放されぬよしにて、往々車上に讀書して居らるゝのを見受け候。先生學殖は深し、辨は快暢、おまけに得意の宗教學と來て居る故、趣味頗る騷多、時刻の過ぐるのあまりに早きをかこたれ候ふ。只才子丈に、あまり氣取り過ぎた所に少々の嫌味有之候。併し先生にかぶれたるものは、あの氣取

つた所がいゝと申候。

夏目、上田、二先生の英語、申分御坐なく、此良師を得て英文科の人々も遺憾あるまじと存し候。

夏目先生此頃『ハクマス』中の his silber skin face with his golden hood とあるを技巧に過ぎたるものとし、一見美しき如きも、毫も吾人の感情に觸るゝことなし、斷じて之れ惡絶の文字なりと、俳句、和歌などの例を引き、セキスヒーアー若しこゝにあらば顔色なからしむるまでに散々に氣焰を吐かれ候らひしが、超えて數日前、一葉の端書、先生の許に舞ひ込みたるよし。其大略に曰「先達て私儀窓より教場の中に忍び入り、貴下のロヒゲの先きにかぢり付て御講義を拜聽致し候處、イヤハヤ中々の御氣焰流石の小生も赧顔の外御坐なく候、就てはかの一行を何と加よきやうに赤いものを加へてお直し下されまじくや。而して教場では最も信すべき一本には

かくくゝとあるべき筈なりなど一吹なし下され度候。拜具。三途の川にて、セキスビーアー拜。文科大學内、夏目金之助様」とあり。思ひ切つたいたづらをするものも候ふもの哉。

ケーベル先生の哲學史（及び哲學概論）、凡そ大學の學科これ程厄介なものはこれあるまじく候。先生英語を以て講義致され候らへども、元來が。ホーランドの人のよしにて、中に獨語を交へたり、英語に獨語の發音をさせたり、加ふるに音聲が低く、一時間通じてチークパーくと喋舌致され候へども、何の事だか薩張分らず。先生の學識如何ばかり深きかは知らねど、我々には一向關係御坐なく候。もしこれが英人、成る丈けならば日本人の講義ならば、せめてこれにより哲學の一斑を伺ふを得べきに、かゝる教師を聘したる大學の氣が知れずとある人は申し候。傍より、否、これは、大學の哲學は外國人の講義だと、大學生の外國語の素養の程を他に向

て誇るべき、いはゞ文科大學の飾りとして大々必要だとなる皮肉家は申し候。

文學博士根本通明先生、身の丈五尺に足らず、雪白の毛髪を惣髪に束ね、五ツ紋の羽織を着流し、手には鐵扇を携へたるさま、まるで蓬萊や高砂の繪巻物中の人物にて候。ある人ははじめ仙人を見たりと申し候。誠や先生一度教壇に立てば、一道の寒光人を射て、さきに嘲笑の態度を以て先生を迎へたる輩も、おぼねず肅然として襟を正し候。先生の老子講義巨細洩らす所なく、一々例を挙げ證を引き、解釋し來るところ、誠に一代の碩儒たるに耻ぢず候。

岡田先生の文典。先生は今迄の文典の破壊を企て居らるゝ様に御坐候。完全なる日本文典を破壊すべきは當然のことにて候、往々點頭し能はざるふしなきにも候はねど、まづ／＼人の氣つかぬ所に心つかれ居候。名詞の有形、無形、特別普通の區別は無用なりなど、今までの文典學

者のあまり申さぬ所にて、而も最も適切なるを覺ゆ候。只、先生の生徒に對する質問はいかにも氣障にて候、まづ欺して置いて試さるゝ所など、まるで小學の生徒に對する口吻、坊やは利口だからねんねしなといふ筆法也。

關根先生の枕草紙講義。先生辨舌頗る達者、中々の大氣焔にて候。引證の該博なる、腹笥の豊富なる人を驚かし申候。

* * *

先達て宣誓式に出席仕候。校長山川健次郎氏破鐘そこ退けの聲にて挨拶致され候。其訓戒の言に曰、學問ばかりよく出來ても身体弱ければ何の功もなき故、運動も亦怠るべらず。又曰、大學は學問を授くるが主なり、學士の號を與へんがために設けられたるものにあらず。故に試験さへ及第すればよいといふ覺悟にて、平素の勉強を懈るが如き心得違あるべからずと。大學でまだこんなことを聞かされては誠に意外の感

なきを得ず。已に二拾の坂を超して、少しは頻面に青髭の生じたるものに、かゝることをいふお方の氣が知れず。小生もお蔭を以て拾年ばかりは若返つた心地致し候。

銀杏城を飛び出してから、やつと心がのびのび致し候。こゝでは探偵に跟けらるゝ患もなく、小むつかしき規則に縛らるゝ煩ひもなく、天下泰平四海波靜かにて候。勿論除名さるゝ恐れがないから酒か飲まるゝといふのでは御坐なく候。夫れ消極的に人に過失なからしむるには、探偵規則の如きは、大に必要なるかも知れず、併し進んで積極的な大なる人物を作らむとするには、こせくした規則の如きもの程害ありて益なきものは御坐なく候。たとへば吾人狹き室の中に密閉せらる時は身に危害の迫ることは極めて稀なるも、吾人はある一種の壓迫を感じ、毫も心を融々と伸すこと能はず候。去て茫々たる曠野

の中を馳する時、或は石に躓くことあるべく、或は陷穽中に陥ることなしとも限らざるも、此時吾人の意氣まさに旺盛、直ちにかの斗牛をも衡かむばかりにて候。力山を抜き氣世を蓋ふ底の氣概は決してこせくした規則を以て縛せらるゝ青年に望むべからず候。近年學生の元氣次第に衰微するは教育者が一は末なる形式的規則を重んじ、根本なる精神の教育を忘れたる弊にあらむかと存じ候。願はくば此の言以つて五高の校長及び含監、二先生の箴とならざらんことを。

次に大學生の風紀をいへば高等學校に於て消極的の教育を受けたる學生が集りたる所に候へば其規則の束縛によりて墮落を支へられたる徒が俄かに束縛の弛みたるを以て、彼等は時至れりと直様酒に荒み色に溺れ候。かくてハイカラ、ユスメテックはまだしも、潔白なる誌上にて申すに忍びざる行をなすにて候、噫、當年大學

生の意氣地を拂つて亦振はず、誠に嘆すべき至りにて候。

以上小生は規則が教育に害あることを述べ候らひしも、小生とてもとより一の學校には其教育の大綱を掲げ、方針を明示する規則なるものが、全然不必要なりと申すには無之候。只、前にも申す如く、今の教育家が形式に馳せて實際を輕んじ、些細のことまで規則々々と呼ぶ癖に、根本たる道徳を閑却せる觀あるを慚焉たるものにて候。ある人は曰、今の教育家（悉皆といはず）は規則を操縱するを知るのみ、生徒に對して毫も同情なく、眞に人物を養成せむとする誠心なしと。吾人は之を信するを欲せずと雖、反證の徴すべきものなきを奈何。諸君、第二の國民を養成せむなご手前味噌をならぶる今の教育家に多きを望むは抑も愚の至りにて候、願はくば學生相互の制裁を以て、誘導を以つて、品

性の陋劣なるものはこれを懲し、意志の薄弱なるものはこれを鼓舞し、然してかの道に進むの風を全國の學生に及ぼしたきものに候。

大學の風紀のよろしからざるは地方の中學、高等學校の教育のよろしからざる故に候。朽木彫るべからず、大學内に於て風氣の革新を叫ぶは時期已におそく御坐候。

本篇は中に責任を明かにすべき箇所ありと信するを以て茲に本名を署す。

十月三十日稿

吉川秀雄

○京都法科大学より。

左の一篇は親友城戸橋軒兄が予が許に寄せたる私信の一節に拘るもの也。茲に餘白を乞ひて掲ぐる事とせり城戸兄並に諸兄諒之焉。

十月三十一日夜 東京にて。吉川病葉。

……とはいふものと大學は妙だ、自由研究とか云つて、あんまり干涉を徹しては、取りつく嶋もない様な心地がする。まだ初太刀を合せぬの

だから尋常の様で實は内々ビク／＼物だ。大學は一ツの怪物だ。頭もなければ尻つぽもない。全体をつべりして居て、掴まへ所がない。兎に角、油斷のならぬ一種氣味の悪い代物である。

來て見れば聞くより低し富士の山とやら、博士と申すもの、斯學の知識は兎も角、人物は五十歩百歩の間であらう。(病葉曰、或は尙甚しきものあらむ。)初めより随分見くびつてはあつたのだが、それでもまだオヴァーレートして居つた。僕はせめて一人位は、風姿高朗の眞君子か、但は俊爽雄邁の眞學者があつて、吾人を薰陶し鞭撻するであらふと、實はそれを頼みにして居たが、今は空頼めとなつた。何れも／＼翻々たる當世の風流才子、拔目のない御方許り、それかあらぬか、さる所にてのもては、大にいゝこの事、人才は已に逝きぬ。前途を望むに來るものなし、止んぬる哉。『勇將の下に弱卒なし』とは。有名なるモルガン對お雪事件の當事者たる

、當大學法科大學の學生某の噂が、遐邇一般に喧傳され、果ては其處此處にて芝居まで仕組んで、其の情事を傳へたるに至ては、今までは大目に見て、むしろ奴と心の中に褒めて居たさうが無神經の教授連中も、世間の手前打ち捨てゝも置かれすといふので教員會議を催して、甲論乙駁、切りに之に對する所置を講じて居る其席上で、風流才子の隨一、博士織田萬が言つた言葉であるそう。茲に於て博士岡松まづこれに同意を表し、始めは一二の不融通漢が、兎や角いつたものゝ、遂には全軍總壞れとなつて會議は其儘に了つたといふ話である。博士織田は行政の才があると言はれて居るが、此言實に彼が才子たるを証明するものである。

『勇將の下に弱卒なし』然り、亂頭蓬髮、衣は肝に至る底の木強漢は、大學に於て見るべからずである。何も僕はむさくるしい木強漢最負ではない、大學の學生ともいはるゝからには、十分

紳士の体面を保つ丈の事はして聞へない。聞へないのみならず、そうする事が必要だと云へば、成程そうかと聞いて置く。しかし、しかしだ、五高出身の、むさい、煤けた様な、他観すれば一文銭の値もない御面相で、髪を分けたり髻を飛ばしたり、僕の髻も大分延びた、併し、僕が髻を立てたのちやなくつて、髻が自身を立てたのである。ヤレ、インガアチスに候ふとは、近頃以て片腹痛い事でござる。玉は磨かざれば光なしといふが、玉でない石や瓦が、何程琢いだつて光が出るものか、いらぬ手入はお止しなさいといひたくなる。

所でさういふ御自身はといふと、イヤ知つてゐるぞ、知つてゐるぞ、昨夜京極で、大枚三拾錢を投じて、羽織の紐を買つたじやないか、アリヤどうだい。コリヤ一本参られた。……………

先刻から、黒雲の中から顔を出したり引つ込んだりして、玻璃窓越しに、まだ寝ぬかと言問ひ

顔の御月様も、雲を袂に早や眠つたらしい、あたり森閑として虫の聲もせぬ。夜は一入冷ゆる様だが、どれ寐るとしやう。(二拾九日、午後拾時、今頃君は何をして居るか知らんと、遙かに東の空を思ひやつて、……橘軒、病葉様。)

○全寮茶話會

改革の紛擾は條理に復するに、若干の時を費したり、例年入寮當日に關するべき全寮茶話會も、各室長及び舊生徒が、新寮茶話會室の會合となり、炊事委員長幹事代理の瑞邦館會議となり、學寮規約の改正となり、幹事の選舉となり、幾多のプロッセツスを経て、茲に十月十六日を以て開催するに至れり。

開會は六時半より。校長杉山武藤の兩教授與舎監生徒課詰の諸氏臨席せらる。幹事黒田君先づ登壇して開會の辞を述べ。その要に曰はく、寮は舎監の寮にあらず、幹事の寮にあらず、將た

學寮會議員の寮にもあらず。實に學寮會員の寮なり。故に學寮の改善進歩を計るは會員各人の責なり。而して入寮以來この責任を帶ぶる諸君の行動には大に元氣の潑瀾たるを認む、いさゝか意を強ふするに足るものなしとせず、然るにこの元氣が恐るべき輕舉に驅らるゝなからむは戒慎すべき一事なり。而も道途の傳ふる所によれば、はやくその蹤跡として認むべき一二あるが如しと。開會の辞は變じて彌次が頂門の一針となる妙なり。

繻縫し繻縫し來りし寮風は、破綻頻々にして至り、苟且なる糊塗の遂に爲すなきに及びて、茲に破壊と新設とを見るに至りしは渟水の自らにして腐るが如し、止むを得ざるの數なり。然るに途説をなすものあり、舍監は學寮に何等の風なるものを認めざるを公言せりと、蓋しこれ一時の權數なり。個人に個人の風あり、團體に團體の風ある、固より當然のことにして、この事

實を否定し能はさるべき舍監が、如上の言をなす權數にあらずして何ぞ。何を以てか是れを云ふ。孔丘の弟子を訓ふるや、必ずその切なるものを以てす。舍監何ぞ寮風を無視せむや。皮想を觀じて速斷に走るは誤てり。舍監の觀する所は、寮風の新設を以て吾人に尤も切なりとするにはあらざるか。然り吾人は寮風を新に興すべきの機に會せり。先に入學式當日に於ける校長閣下の諄々として説く所、これ吾人が理想の標的となすべきものにあらずや。吾人は此秋に際して彈冠して起ち、以て寮風を新に興起するの事に當らん。復た一快事たるを失はざらむと、悲壯の辨を以て岩松君の論する所如上。直ちに余興に移る。

奏樂の聲は一段の景氣を増し、寮歌の合唱は堂も破れむ計りに、曰く詩吟、曰く劍舞の間々には、歡語の喃々いこと樂しげに、狂言の滑稽はさんぐに抱腹せしめ、最後の筑前琵琶は例に

よりて、拍手に迎へられ、喝采の中に終り、結果は更に寮歌の合唱、空もとどろけとねめいて大團圓。

○學寮ボート競争

三百の健兒秋高肥馬の時に際して腕鳴り肉躍り自由なる樂しき日を湖上の漕艇に經々たる快心の事にあらずや尤も見晴ありしは各寮責任レスなり體格の点より見て尤も優勢なりしは北寮にして南寮之に次ぎ新寮は最下に位す而も勝利の桂冠最も囑望せられさりし新寮の手に歸せり赤艇先づ決勝線に入りろの差僅に尺餘にして青艇入り紫も赤青に後るゝこと尺餘青は舵手の常に舵を引けりしを見ればサイドの調和を得ざりしにはあらざるか最も愛嬌ある出來事は赤に應援者の少なきを見て誰やらが集へる小供に「芋をやるから赤！赤！とおめけ」と煽てしことなり最も滑稽なりしは連敗者のみの二艇を競漕せ

しめ結局五人の連敗者を出せしことなり最も氣の毒なりしは七回出漕して七回ともに豎子をして名をなさしめしものあることなり最後に月日は十一月八日去年ならば銀杏の城に秋たけて十万の貔貅が肥筑の野に馳突するの狀を親しく御統監めらせられんとて不知火の筑紫の果に出でませし 聖駕奉迎のその日なりき

○短艇部報

秋高く氣澄み、江津の秋色轉た壯夫の腕を鳴らしむ。

西海の覇者我校短艇部は、年と共に隆盛の域に進み、今や其技に於ても大に見る可き者あり。宜哉、各部競漕會の壯舉頻々吾人の耳朵を打つを。

先づ十月十八日、工友會有志競漕會開催せられしを先登に、廿五日、一部綠俱樂部競漕會。超へて十一月一日に二部有明俱樂部。……………

天長の佳節には三都江龍俱樂部競漕會あり、各部共例年になき非常の盛會にて、回数多きは十六回少きも拾回を下らず、今に初めぬ事ながら青、紅、白、紫、勇ましく腕の限り根かぎり勵まされもし、勵しつゝ漕ぐ手休めぬ雄々しさよ、あはれ龍南健兒が倒れて已むの決心はこゝ江津湖上の花なるかな。

(委員)

○寮中私見

○ウオルズォルス、嘗つて山水の幽棲を去つて、居をロンドン市中に移せることありき。滿都の紛擾、人皆狂するが如く、區々の事物、詩人の意馬を驅りて空しく風塵の中に老けしめんとするに似たり。而かも彼れは常に「最大」のものを記憶し、之に由つて心胸愈高潔の域に進み、方寸の海決して其の平靜を破らるゝことなかりしと。嗚呼我學寮をして此の「最大」のものを記憶せしめよ、一向專念之を實現せんと力むる時

斐然として精華の見るべきものあらん。區々一美德を標章して、人をして悉く之れが模型中に強いんとするが如きは陋と謂はざる可らず。知らずや其の剛毅と云へ文雅と云ふも畢竟理想が之を体せんとせる人の賦性に從つて實現せられたる一面の形式に過ぎざるを。只吾人をして理想の人たらしめよ、然らば種々の美德は各人の性格に從つて光輝を發揮し、庶幾くは水の至る所渠之に從ふが如くなるを得んか。

○茲に斷じて酒を飲まず煙草を喫はざる人ありとせんに、強ゆること再三、尙聞かざるに及びて、之を嘲つて曰く爾の宗教之を禁ずるか、此の如きは往々にして聞く所。何ぞ其の思想の杓子定規的なるや。嗚呼冷酷なる道德律を以て生ける人生を拘束し得べしと思惟する短見者流よ、爾は此の種の思想が如何に國民の天真を沮害し情操を乾涸せしめたるかを知らざるか。至情の衷に動くや切、即ち欣然として之を完うす

るの美なく、屁理屈を逞うして先づ其の是非を考較し、後ち逡巡として事に當るの弊を生ぜしもの一に皆何々せざるべからず何々すべからずてふ乾燥無味なる道德論によるを知らざるか。斯の如くにして元氣は阻喪し、社會は沈滞し、血なく涙なく蠢爾として傀儡の行列の如くなれり。

嗚呼我は「欲」す、夫の杓子定規説果して何爲るものぞ。我は言はんと「欲」する所を言ひ、爲さんと「欲」する所を爲さんのみ。羈束は我堪ふる所に在らず。然れども我は「最大」のものを忘れず、其の「欲」する所は之に達せんとすることなり、然り我は眞に之を實現せんことを「欲」して止まず。是を於て滿身の心血之に向つて沸ぐ。昔者爲朝、清盛の輩を罵つて曰く鎧袖一觸自ら仆れんのみと、我は即ち曰はんとす此の專心を以て我が進む所、紛々たる害物自ら潰る去らんのみと、豈特に忍耐するを要せんや。聞説らく昔京都に某兩替屋あり、其の家法徒弟をして初め二

十年間純金のみを取扱はしむるを常とせしが、後ち賈物に會するや、如何なる者と雖ども手に從つて之を區別し得たりといふ。是れ即ち「最大」のものを記憶し、一意之が實現に力むるものに譬ふべき也。我は青春の熱血と氣力と、悉く茲に傾注せんかな。

○剛毅朴訥論は幾度か提唱せられき、而して其の反響を如何とか見る。我常に謂らく校風は初め中心人物の活動によつて發すと、然り我校剛毅朴訥の美風は決して偶然に起りらざりき。是れ實に理想が剛毅朴訥たるべき資質ある先輩に接觸し、其迸發する所即ち此形式を取りて現はれ、更に傾向を同くせる地方の學生に鼓舞せられたるによる、是れ我校が所謂韋軒先生時代に於て鬱然として天下に雄視するを得たる所以。而かも今や如何四圍の事情幾何かく此の條件に適せりとする。剛毅朴訥の中心人格はありや、將た學生の傾向は昔日と同じきを得るか、今

や區々一美德を云々して徒に往事に戀々たるの時に非ず、余は直理想の歸著点に徹して所謂「最大」の者を得ん事を欲す、而して諸徳は其發現に任せんのみ。寮風論の盛なる時余は敢て新來の諸君と特に先輩當局の猛省を乞はざる可らず。○學寮をして宏量ならしめよ、豁達ならしめよ、少しく毛色の變りたるあれば、之を窮追して其の特長を沒せしめんとするが如きは余の取らざる所なり。寧ろ若かんや、特長を發揮せしめ以て互に相利するあらんには、乞ふ多辨者をして益々多辨ならしめよ、善謠者をして益々善謠せしめよ、只其の材料の可成善美なるを要す、他の妨害と成らざるを要す、然り相互の研磨訓練上各、他をしてかくなさしむるを要す。

○又我は欲す、學寮をして責任の府たらしめよ、各をして自己に對し、室に對し、寮に對して責任を感せしめよ、今日の弊は其の責任を知らざるにあり、試に一例を舉げんか、或る種の會議

ありとせんに、議員の多くは殆んど議事の何たるを解せざる如く更に痛痒を感ぜざる如く茫乎として入り漠然として去る、之れ議員を選むものと選ばれるものと共に責任を盡くさざるに因らざるか、選むものは何ぞよく人を見ざる、選まれしものは意見あらば何ぞ速に之を吐露せざる、會議は常に此の種の議員に依つて、滯滞し無意義とならんとするにあらずや。

○事ある、之に當る人を見るに往々眞面目ならざるもの、好適ならざるものを見るは前に云へる如し、之れ一二回演説をなすか、或は其の他のことによつて姓名を記憶せらるれば、選舉に際して直に之を挙げ、或は學科の成績可なれば即ち以て信すべしとなして之に托するに責任の地位を以てするによる、人物は強記者と異なり、學才は事務の才と同じからず、須らく個中の消息を詳にし以て愛寮の誠を致すべし、然らずんば、寮風の振作得て望むべからず、相互の訓練

得て行はるべきにあらざる也。況んや戯に人を挑發して御先に立たしむる如きは、其の輕薄豈慎まざるべけんや。

(天民)

〇片々錄

演說部員

演說部員なるもの募集さる。部長の意に曰はく、弓術部に部員を有するの聲に嫻ひ、所謂部員を募り、熱心着實なる同好の志を得て練辨の技を講せむ。或は効果が個人の上にのみ止まらずして、斯道に貢獻する所あらんかど。尨大は雜糅を意味し、雜糅は不統一を意味し、乱調を意味す。而して所謂法科生懇話會は、練辨の一關たりと雖も、その收容の範圍や、狹隘にして單に法科生たるに限り、その他のものに至りても、或は人員を制限し、部を制限し、未だ充分なる練辨の場として満足すべきものあらず。然ども演說例會に至りては、雜糅不統一乱調たるの嫌な

きにあらず。然るに此秋は際して此舉あり。吾人は双手を揚げて之を賛するものなり。舌鋒三寸能く風を叱し、雲を排するの辯士、或はこの間より輩出せむかな。吾人は部長委員に對してその勞を謝すると同時に、囑望する所も亦決して輕からざるなり。之を委員の言に聞く、曰はく部員とし得たる所約四十名、且つ漸次増加の趨勢を示すと。賀すべきかな、賀すべきかな。部員諸子幸に龍頭蛇尾に終る勿れ、至囑。

テニス俱樂部

『今の時に當りて運動の必要を説く既に遲し』。これ發起者の言なり。然り、これを喋々せむは全然蛇足たるを免れず。唯現下我校に於ける斯界の隆盛を觀その趨勢を察するに及んでは、此舉の一日も早く完成せられんことを望ざるものなかるべし。見よコートに顯はるるもの誰れか自らラケットを所持せざるものありや。而も二箇のコートは到底是等の人を満足せしめ得ざ

るは炳然として明かなり。或いは運動場の芝生に球を弄するあり、或はコート側に試みるあり、或いは順番の來るを俟つ能はず、時間の許さざるを恨んで、漸次にコートを遠ざからむとするあり。而してこの俱樂部の目的は何んぞや。曰はく技を練るにあり。事業は何んぞや、曰はく新たに俱樂部専有のコートを作ることなり。是れ目下テニス界の要求幾分を満すを得んか。然も自ら鋤を取り勞力を寄附して、コートを作らむとするに至りては、如何にその意氣の壯なるかを思へ。如何にその必要に迫られたるかを思へ。

學 寮 會

去月廿六日學寮會は瑞邦館に開催さる。從來用ひ來りし職員食堂は、室狹隘にして全員の收容に堪へずとするか。將た傍聽者の多數を收容するに便ならざるによるか得て知らず、然れども、爾今每會の會場必ず本館ならむことを望んで止

まず。寮をして一大家族の如くならしむる。これ吾人が素望なり。家族の事を計るに必ずしも少數者によりて、秘密的になすの必要あらむや。要するに吾人は本會の公會を喜ぶ。然りと雖も、試みに來て未だ寮事に通せざる新入室長の討議を見よ、吾人が何となく懷古の情を禁ずる能はざるは、あゝ是れ何の故ぞ。

端艇部復活

客年、學寮十二の運動部は、減縮されて四となり。而して當時端艇部も亦棄拒の悲運に遭逢せし一なり。本夕の議題の一として、これが復舊の説あり。而も多數を以て決せらる。吾人は之に干して言はむと欲するものなきにあらず。この復舊は果して各人が操艇の量の上に影響することありや。單に學寮に本部ありとの名のみを終るにあらざるか。否寧ろ爲めに要する所の金額と時間とは徒費するものにあらざるか、思へ、漕ぐものゝ數は一定せり、漕がるべき艇數

は一定せり。三と二とに分るゝとするも五は永遠に五なり。あゝ熱せるものは遂に諭すべからざるか。

所謂餘興

嚴格は親睦を得る所以にあらず。交友の緒をなすは、多くは驢語談笑の間にあり、胸壁を設けざるにあり、オッフエンボールなるにあり。所謂會の多くは餘興會の又の名なるが如き觀をなすも、吾人は決して之を不可なりとせず。只言はむとする所は餘興のものの性質に關してなり。相證表裏は相俟つて完璧を得べし。一堂に會する二百の學徒、その趣味は斷じて野界ならざるべし、茲に行はるべき餘興は少なくともこの趣味に觸れ、此趣味に排せられずして、捧腹解頤の料たるを得るものならざるべからず。蓋し當事者要心の一なり。妄りに張三李四が狂喜亂痴戲の料を以て、人をして顰眉せしむるが如き事なからむは、これ亦當事者が戒愼の二なり。

且つ或る範圍に於て意氣の激發に資するが如き、積極的功果の得らるべきものを採らむことは、亦た當事者が意を致すべきものゝ三なり。吾人は骨硬を氣取らず、批評の言は之を弄して得たりとするものにあらず。且つこの際その甚だ凶なるを知るが故に今多くを言はざるべし。されど聞説く、這回の餘興斡旋者は勸誘よりも寧ろ拒絶の辭に窮せりと、以て如何に多くの餘興希望者の存せしかを知るべし。而も撰擇の結果として表はれたるものが、當日行はれたるものゝ如しとせば、吾人は歎すべき一二の事由をその間に認めざるを得ず。吾人は之を指摘せざるべきも人或は之を識認したる所あるべし。然りと雖も、這回の餘興は當事者の苦心の甚だ大なるを認むべきあり。その從來に比して甚だ進善の跡を認めざるにあらず、されど武骨漢、田舎漢が、次第にその蹤跡を息めて、辭令に嫻へる粹なる通人なる都人士が跳梁の傾向を示しつゝあ

る今日此頃、敢て箴言をなして、後來を誠しむるあらむとす。

他山の石

『柔道部報の大會記事は……その容貌を如くし風采を月旦するが如き吾人之を取らず少しく一高健兒の躰面を重んぜられむことを希望す』是れ一高校友會雜誌中の記事なり。その要意の存する所を察すべし。見るもの以て他山の石となすの懷なきか。

諮問案

學寮の爲めに使用し得べき三百餘圓の費途に干して、這回の學寮會は舍監の諮問を受けたり。吾人は當初之を聞いて竊に以爲らく、全体の意向を察し、現下學寮の趨勢を案じ以て最も公平にして切要なる方面に用ひざるべからずと。而して該諮問案は十五人の委員附托となり、更に討議する所あり、その結果としてテニスコート二場の新設及び食堂に額を掲ぐる事決せらる。

是れ稍や吾人が希望の空しからざりしを喜ぶされど爲めに費さるべき費用は僅に六十圓に過ぎず、殘餘六分の五の金額は如何に用ひられしか、曰はく學寮に圖書館を新設することはなりと吾人は今少しく之に對する意見述べむか。

大牀に於て吾人は之に賛せざるにあらず、而も其費額に對して慊らざるものあり、蓋し吾人は不急を後にして急を先にする事の此際大に考量すべき者なるを知るか故なり。圖書館の事或は學寮をして趣味あらしむる者の一ならむ。この意味に於てその効果は積極的なりと主張するものあらむ。されど學寮に起臥するものをして學寮を嫌忌するの情を止めむには、その効益の消極的なるにもせよ最も當事者の注意を値するものにはあらざるか。

若し慎重の調査を経ば現在の學寮に幾多の設備を要すべきものあらん。試みに通學生をして寮の欠点を指摘せしめよ、必ずや曰はむ食堂の不

潔と自習室の塵埃の多きとなりと、新來の人に對して寮は如何にと問はゞ亦同様の不平を以て答へむ、一學年の終りに至りて寮生の三分の一を失ふに至るは多く茲に起因するなり、修學に不便なりとは多くの出寮者が表面の口實にして、實際に至りては下宿の清潔と靜閑なるを慕ふに出づるなり。少しく此の間の事情を思はゞ食堂改善の如き、相接して學校の圖書館を有せる我學寮に更に其の一を加へん設備に比して、比較的急務なりと認む。而して之を成さんには必らず之が調査に要する時日を假さざるべからざるなり。要するに吾人は評議員諸氏が斯かる可なり巨額の金員に對し毫も豫備的の顧慮を費さず、深く急不急を察せずして、一氣に費消し盡さんと試みしを惜む。

音 樂 部

現代國民趣味の低落は誠に一代の欲陷なり、吾人は實用主義の類波滔々として正義廉耻の風地

を掃はんとする今の時に當り、極力文學美術に對する趣味の涵養を推獎し、殊に自我の境地を脱して直に美象其の物と同化するに至大の感化力ある音樂の修養を以て最も急なりとす。而して吾人は總ての設備殆んど完美の域に近つかんとせる我が學寮が、尙且つ一の音樂部を有するに至らざるを悲む。誠に今の寮生に必要なものの賄の珍珠にあらず、將た圖書館にもあらず、即ち醇正なる歌と樂なりと知らずや。あゝ玉盃に花受けて」が大唱せらるゝを聞く毎に、吾人は轉た一種の感なき能はず、聞説く此の曲譜は一高生の自作なりと、未だ其眞偽を知らずとも、而も既に自己の寮歌を有し乍ら尙且つ他校の寮歌を吟するを止む能はざらしむるものは如何、凡そ吾人が腔裡溢るゝが如き活氣と感慨とは決して柔術擊劍と漕艇等々に依て漏し盡す能はざるべし。天は吾人に美妙の韻律に感應すべく將た個人として清淨なる品格を作らんか爲め

に、一種穩健秀雅なる情緒を賦與したるにあらすや。而も比較的高等の趣味を趁へる我が寮生が尙音樂に關する設備をなすに遅々たるは何の故ぞ、事に寮務に當るもの當さに三思して可なり。

修學旅行

大觀すれば演習は一種の滑稽戲なり、此の滑稽戲を演せんが爲めに重戈を擔ふて旅程に上る、われ甚だ其の徒勞なるやを疑ふ、而も校長既に軍隊組織なるべきを諗け且つ艱難に堪へ窮乏を忍ぶべきを訓す、既に斯く觀すれば修武旅行の方法として銃を負ひて山谷を渉る固より其の處なるべきなり、然りと雖も、既に修學旅行と命名する上は今少し修學らしき効果を得べく圖られんことを當局者に望む。從來の旅行に於ては史料蒐集隊なるもの編成せられたることあり。而して今は如何、例年編せられし測量隊の如きも廢せられぬ。吾人は今回の修學旅行の例年の

に比し著しく整齊せしを喜ぶと雖も、唯此の一事の歛如せしを惜む。

入寮雜感

寮生の言路を開かんが爲めに曩に募集せし入寮雜感は、意外にも適切なるもの少く、吾人が期せし寮風振作の資とするに足るものなかりしを以て遂に掲載することを見合せたり。諸子諒焉。

○正誤

前號雜報欄委員變動の項に、雜誌部委員云々であるは端艇部委員の誤植に就き茲に正誤す。

○寄贈雜誌目錄

國士 第五九號

六合雜誌 第二七四號

教育時論 自六六五至六六九號

無盡燈 自八卷十號至十一號

教育公報 第二七六號

尙志會雜誌 (二高) 五六號

研瑤會雜誌 (長崎醫學專門學校) 五六號

江原 (熊本中學) 第一號

校友會雜誌 (杵築中學) 第四號

家庭新聞 第十一號

九州教育會雜誌 自二二九至二三二號

校友會雜誌 (二高) 第三百十號

國士 第六十二號

學友會報 (山口高等) 第二十三號

與風會雜誌 (早稻田中學) 第三卷

